



対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応について : 他者の意図としての敵意と嫌悪に注目して

相澤, 直樹

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(2):1-10

(Issue Date)

2010-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002091>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002091>



対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応について —他者の意図としての敵意と嫌悪に着目して—

Hostile and Aversive Intent Interpretations and Emotional Reaction in Interpersonal Conflict Situations

相 澤 直 樹 *

Naoki AIZAWA*

要約：本研究では、Dodge ら (Dodge, 1980, Crick & Dodge, 1994) の敵意帰属研究をもとに、対人挑発場面と対人疎外場面における否定的な意図判断と情緒的反応を検討した。先行研究を参考に、新たに対人挑発場面と対人疎外場面を作成し、場面想定法を用いて一般青年男女の自由記述反応を収集した。得られた回答項目を分類整理したところ、各場面の判断を問う質問に対する自由記述回答では、対人挑発場面については「敵意判断」と「非敵意判断」、対人疎外場面では「嫌悪判断」と「非嫌悪判断」の大分類をえた。また、その時の情緒的反応に関する自由記述回答については、両場面に共通して「怒り」と「傷つき」の大分類をえた。これらの結果をもとに各調査協力者にその回答の有無による質的変数を割り当て、回答者数の χ^2 二乗分析を用いて場面間の敵意判断、嫌悪判断同士の連関、ならびに、場面内の敵意判断と怒りの情緒的反応、嫌悪判断と傷つきの情緒反応との連関を分析した。その結果、おもに嫌悪判断については有意な結果が得られたものの、敵意判断については有意な結果は部分的なものにとどまった。以上の結果について、場面特定性、性差ならびに年齢差、対人疎外場面との差異の観点から検討し、今後の研究展望を考察した。

キーワード：意図帰属、対人葛藤場面、場面想定法、青年期、自由記述法

問題と目的

私たちは、日常生活の中でさまざまな他者と出会う。他者は、私たち自身の都合とは別個に存在しているため、常に私たちの思い通りに動いてくれるとは限らない。そのため、ひとたび現実の対人関係に入ったならば、常に思い通りにならないことを体験する。中には、私たち自身にネガティブな結果をもたらすような出来事に出会うこともある。そのような場면을広く「対人葛藤場面」と呼ぶならば、私たちの日常生活は深刻なものから些細なものまで対人葛藤場面にあふれている。

日常的な対人葛藤場面は、さまざまな解釈や判断の幅を許容している。その出来事を「全くの偶然によって生じた」とみなすこともできれば、「他の外的な原因により生じた」と受け取ることも可能である。相手側の要因により生じたとする場合でも、「何らかの止むに止まれぬ事情で相手がそのような行動をとった」とみることもできるし、「相手の単なる過失による」と判断することも可能である。そのようなさまざまな可能性の中で、対人葛藤が何らかの「相手の意図」によってもたらされたと判断することは、特殊な位置にあると考えられる。通例、対人葛藤場面は、それに対する情緒的反応を

誘発し、何らかの行動へと駆り立てると考えられるが、相手の意図に位置づけた判断は特殊な情緒的反応と行動をもたらすものと考えられる。

以上の問題と関連して、近年系統だった研究成果を報告しているのが Dodge ら (Dodge, 1980, Crick & Dodge, 1994) による「敵意帰属バイアス (hostile attributional bias)」の研究である。敵意帰属バイアスとは、攻撃的な児童に特徴的にみられる「対人挑発場面 (provoking situation)」の認知様式であり、ネガティブな出来事に直面した際それを相手の敵意によるものと認知しやすい傾向を指す (Dodge, 1980, Steinberg & Dodge, 1983)。攻撃的な児童とそうでない児童とを比較した場合、相手の意図 (敵意的であれ善意的であれ) が明白な場面に両者の間で差異は見られないものの、「相手の意図が曖昧な否定的状況 (ambiguous-intention-negative-consequence situation)」においては、攻撃的な児童はそうでない児童よりもより頻繁に相手に敵意を帰属する。その結果、攻撃的な児童は、対人挑発場面において相手に対する報復的行動 (aggressive retaliation) へと向かいやすく、このことが攻撃的行動の頻繁な発生に結びついているものと考えられる。この敵意帰属は、その後の研究でいくつもの認知処理過程と関係することが明らかにされている。す

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科講師

(2009年9月1日 受付)
(2010年1月12日 受理)

なわち、認知処理の性急さ (Dodge & Newman, 1981) や対人的手
がかりへの注意欠如 (Dodge & Newman, 1981, Dodge, Murphy, &
Buchsbbaum, 1984), ならびにそれと表裏の関係にあるセルフ・ス
キーマの優勢 (Dodge & Tomlin, 1987), あるいは、内面的な脅威
感情の活性化 (Dodge & Somberg, 1987) などが敵意帰属や攻撃的
行動を促進する。以上の研究成果を受けて, Dodge らは, 対人状
況の表象化段階から行動の実行段階にまでいたる過程を包括的に
とらえた「社会的情報処理モデル (social information-processing
model)」を提起している (Crick & Dodge, 1994)。この社会的情報
処理モデルは, その後の膨大な調査実証研究により支持されている
(Akhtar & Bradley, 1991, Crick & Dodge, 1994, Orobio de Castro,
Veerman, Koops, Bosch, & Monshouwer, 2002, 吉澤, 2005)。

また, Dodge らに始まる敵意帰属研究は, その多くが「場面想
定法 (hypothetical situation method, Crick & Dodge, 1994)」と呼
ばれる特殊な手法を用いている点においても特徴的である。これは,
調査協力者に対しある具体的な対人挑発場面を提示し, その場面が
実際に自分自身に生じたと想定させ, その事態に対する調査協力
者の判断を報告させるものである。Orobio de Castro et al. (2002)
によると, 場面提示方法については, オーディオ機器や調査者の朗
読による音声提示が最も多く, 次いで, ビデオ映像による提示が主
流を占めている。その他, 文章による提示, ステージ上での実演,
絵画などの手法が用いられている。また, 回答方法としては, 自由
回答, つまり, インタビューやビデオ記録をもとに調査者が評定を
おこなう手法がもちいられることが多く, その他, 調査協力者自身
による多肢選択法, 評定尺度法が用いられている。以上のような特
殊な方法がもちいられるのは, 第一には Dodge による初期の研究
から敵意帰属研究の主な対象者が学童期の児童であったことによる
ものと思われる。低年齢層の調査協力者は, 日常的な体験を想起し,
自己報告することが一般に困難であると予想されるため, このよう
な手法が用いられたのである。加えて, より実際経験に近いかたち
で調査協力者の体験を報告させることを重視していることも関係し
ている。敵意帰属のような認知様式は, その状況下で一時的に体験
されるものがあり, しかも, 体験内容がネガティブなものであるこ
とから必ずしも明確に自覚されるとは限らない。そのため, 実際経
験に近い体験を調査協力者に直接的に与え, その時の体験を報告さ
せる必要性があったものと考えられる。

以上のような Dodge らによる敵意帰属バイアスの研究は, 膨大
な実証的研究を通じてその妥当性が支持されている。しかしなが
ら, 対人葛藤状況をもたらした他者の意図としては, おおむね敵意
のみに調査が集中している。対人葛藤状況をもたらす他者の意図と
して, 敵意が重要なものであることは間違いがない。しかし, 必ず
しも敵意のみに限定されるとは限らない。それ以外にも, 対人葛藤
場面, 中でも他者から忌避されるような場面 (以下, 「対人疎外場
面 (estranging situation)」とする) が他者の「嫌悪的な意図 (aversive
intent)」によってもたらされたと判断することも生じうるものと
考えられる。対人関係が相互の評価を確認しあう場面としての意義
を持つことを考慮すると, 他者の意図として嫌悪を認知することは,
その後の情緒的反応や行動傾向に重大な影響をもたらすものと考え
られるのである。

以上の問題意識と類似する研究としては, Crick を中心とした「関

係的攻撃 (relational aggression)」の研究があげられる。Crick (1995)
は, 従来の敵意帰属研究が身体的攻撃や言語的攻撃などの顕在的攻
撃 (overt aggression) のみを取り上げていることを指摘し, それ
らとは性質の異なる関係的攻撃の重要性を主張した。関係的攻撃と
は, いわゆる「仲間外れ」や「無視」などにみられような, 仲間関
係を介して相手を攻撃することを指している。その意味で, 本稿
で取り上げている「嫌悪」と類似した現象である。しかしながら,
Crick の関係的攻撃においては, 嫌悪感の表明は攻撃の手段に過ぎ
ず, 他者の意図としては従来通り敵意のみが問題とされている。し
たがって, 他者の意図そのものとしての嫌悪に焦点を当てる本研究
とは趣旨が大幅に異なっている。

別の研究としては, 久木山による「自責帰属」の概念があげられる。
久木山 (2000, 2002) は, 思春期・青年期における「引っ込み思案
行動」を社会的情報処理モデルの観点から研究した中で, 引っ込み
思案行動を説明する上では敵意帰属のみでは不十分であることを指
摘している。そして, Rosenzweig のアグレッション理論を参考に,
社会的情報処理モデルの解釈段階に「自責帰属」を導入し, 目標設
定段階, 反応検索段階, 反応実施段階についても新たな改変を施し
た「社会的情報処理尺度」を作成した。ここでいう自責帰属とは, 「意
図の不明瞭な場面において自己に過失もしくは欠陥があることを帰
属するバイアス」 (久木山, 2000, p.226) を指し, 本稿で取り上げ
る嫌悪意図との類似性が高いものと思われる。しかし, 厳密に見れ
ば, 自責帰属は, 対人葛藤場面の原因を自己に求める帰属のバイア
スを指しており, 本研究で取り上げるものとは必ずしも同一ではな
い。

以上のように, 対人葛藤場面の体験を他者の意図によるものと
位置づける判断の中で, 他者の嫌悪を取り上げた研究はいまだほ
とんどおこなわれていない。しかしながら, 敵意のみならず, 嫌
悪も対人葛藤場面に対する情緒的反応や行動傾向に重大な影響を
もたらす判断様式であると考えられる。それゆえ, 対人葛藤場面
が相手の敵意により生じたとする判断 (以下, 「敵意判断 (hostile
interpretation)」とする) と嫌悪により生じたとする判断 (以下, 「嫌
悪判断 (aversive interpretation)」とする) のそれぞれの特徴を検
討することは大変意義のあることと思われる¹。そこで, 本研究で
は, 青年期の調査協力者を対象に, 他者の敵意, ならびに, 嫌悪に
より生じたと認知されうる対人葛藤場面をそれぞれ作成し, 場面想
定法による自由記述反応を収集・整理することを通じて, それらの
特徴を検討することとした。

なお, 青年や成人を対象とした対人挑発場面は, すでにいくつか
の研究において作成され調査に用いられている (Epps & Kendall,
1995, Homant & Kennedy, 2003, Tremblay & Belchevski, 2004,
Combs, Penn, Wicher, & Waldheter, 2007)。しかし, 場面想定法
ではかなり具体的で詳細な場面設定が必要となるため (Crick &
Dodge, 1994), それぞれの社会文化的背景を色濃く反映したものとな
っている。そのため, それらの場面を日本の青年男女に用いるの

¹ 従来用いられてきた「帰属 (attribution)」の概念を用いると, 対人疎外場面
における嫌悪的な意図を理解するに際して混乱が生じるものと思われる。原因帰属
の観点からは, その出来事の原因は「(嫌われている) 自分」に位置づけられてし
まうからである。本研究では, あくまで相手の意図によって生じたと認知する側
面を重視している。そこで, 「帰属」ではなく「判断 (interpretation)」を用いる
こととした。

は妥当ではないと考えられる。相澤 (2009) は、この問題意識に立つて、前掲の先行研究と久木山 (2000, 2002) による研究を参考にしつつ、あらたに一般大学生・大学院生を対象に対人葛藤場面の内容を収集整理し、複数の対人挑発場面と対人疎外場面を作成している。ただし、調査の結果、そのうちの多くで敵意判断や嫌悪判断の出現頻度が低く、十分な場面数を確保するまでには至っていない。そこで、本研究では、相澤 (2009) の研究の中で妥当とみなされた場面に新たな場面を作成し追加したものを用いることとした。

方法

1. 場面作成の手続き

相澤 (2009) は、先行研究 (Epps & Kendall, 1995, Homant & Kennedy, 2003, Tremblay & Belchevski, 2004, Combs, Penn, Wicher, & Waldheter, 2007, 久木山, 2000, 2002) を参考に、心理学を専攻する大学生、大学院生を対象に意図の不明確な他者による対人葛藤場面として7場面 (対人挑発場面4場面、対人疎外場面3場面) を収集している。しかしながら、それらを一般大学生に実施したところ、適切に意図判断を抽出しえたものは5場面 (対人挑発場面3場面、対人疎外場面2場面) にとどまった。そこで、本研究では、さらに新たな場面 (対人挑発場面1場面、対人疎外場面2場面) を追加したものを使用した。以上の8場面を質問紙を介して文章により調査協力者に提示し、その場面で生じた理由を問う質問項目 (質問①) と、その時の情緒的反応を問う質問項目 (質問②) に対して自由記述式による回答を求めた (場面提示と質問項目を付録に例示した)。各場面の概略は以下のとおりである (() 内は場面の略称)。

【対人挑発場面】

- ①見知らぬ男性に路上で衝突される場面 (衝突)
- ②自分が教室で読書しているときに灯りを消される場面 (灯り)
- ③タクシーに乗車拒否をされる場面 (タクシー)
- ④授業でプレゼンテーションを非難される場面 (プレゼン)

【対人疎外場面】

- ①電車内で隣の同世代の人に席を立たれる場面 (電車)
- ②自己紹介中に席を立たれる場面 (自己紹介)
- ③路上に屯する若者たちから笑い声が聞こえる場面 (笑い声)
- ④授業のグループ分けに取り残される場面 (グループ)

なお、以上の場面のほかに、緩衝場面として意図の不明確な他者からポジティブな出来事がもたらされる場面2場面を付加した。

2. 調査対象者と質問紙の構成

調査対象者は、関西圏の4年制国公立大学と私立大学に在籍する学生267名 (男性63名女性203名、平均年齢19.50歳) であった。調査期間は2009年5月から6月であった。調査の実施にあたっては、大学の講義時間中に質問紙を配布しその場で回収した。なお、調査開始当初は1. に示した10場面のすべてを含む質問紙を用いていたが、途中、調査時間が長引きやすく一部の授業内では実施が困難となった。そのため、対人挑発場面と対人疎外場面各3場面と緩衝場面2場面に場面数を削減した調査質問紙をもちいることとした。実施する場面を適宜選択し、全体として各場面に対する回答者数が同数になるように工夫を試みたが、調査実施の制限上厳密には困難

であった。結果的に得られた各場面に対する回答者数はTable 1のとおりである。

Table 1 各場面の調査協力者の概要

場面	総数	性別 (男性 : 女性)	平均年齢
衝突	233	61 : 172	19.61
灯り	225	60 : 165	19.68
タクシー	229	59 : 170	19.62
プレゼン	227	53 : 174	19.68
電車	231	60 : 171	19.62
自己紹介	218	59 : 159	19.70
笑い声	225	60 : 165	19.60
グループ	219	50 : 169	19.69

結果

1. 各場面の回答内容の分析

各場面にに対し得られた質問①②に対する自由記述回答をチェックしたところ、多くの回答で複数の回答内容が含まれていることがわかった。そこで、各回答を内容ごとに分離し項目化したものを、心理学を専攻する大学生、ならびに、臨床心理学を専攻する大学院生とともに、字句表現上の同一性をもとに分類整理しそれらを小分類とした (Table 2, Table 3)。そして、それらの小分類を本研究の目的に照らして検討し、以下のように大分類を決定した。

まず、対人挑発場面に対する質問①への自由記述回答については、場面設定の違いによる影響を受けながらも、相手の否定的な意図、(敵意、悪意、いじめ、苛立ち、不機嫌、怠慢、性格の悪さ、自己中心さなど) が各場面で一定程度の割合で認められた。そこで、それに相当する小分類を「敵意判断」の大分類にまとめた。また、残りの小分類のうち、「わからない」「その他」以外については、相手の過失や何らかの不可避な事情、偶然、自分自身の要因によりそのような事態が生じたとするもので、いずれも非意図的な判断となっている。それゆえ、それらをまとめて「非敵意判断」の大分類にまとめた (Table 2-1)。

次に、対人疎外場面に対する質問①への自由記述については、かなり内容的に共通性のある否定的な意図が認められた。それらは、自分に対する嫌悪、忌避、無視、侮辱などによってそのような対人疎外場面が生じたとする判断である。したがって、それらに相当する小分類を「嫌悪判断」の大分類にまとめた。また、残りの小分類は、前者と同様に非意図的な判断となっていることから、「非嫌悪判断」の大分類にまとめた (Table 3-1)。

一方、質問②に対する自由記述回答を検討すると、対人挑発場面と対人疎外場面の両者を通じて、各場面特有の回答項目が見られるとともに、情緒的反応の記述としてはかなりの共通のものがみうけられた。それらの一部は、相手に対する怒り、苛立ち、不快感、非難、不満など積極的で攻撃的な感情を表明したものとしてまとめられるとともに、また、別のものは、悲しさ、さびしさ、恥ずかしさ、傷つき、落ち込み、不安など消極的な苦痛感情を表明したものとしてまとめられると思われた。そこで、前者に含まれる小分類を「怒り」の大分類に、後者に含まれる小分類を「傷つき」の大分類にまとめた (Table 2-2, Table 3-2)。

以上の手続きを通じて、本調査により得られた自由記述回答は、対人挑発場面における質問①については「敵意判断」と「非敵意判

Table2-1 対人挑発場面における質問①「どうしてその人は～をしたのだと思いますか」への自由回答反応の整理*

場面 大分類	【衝突】	【灯り】	【タクシー】	【プレゼン】
敵意判断	・私が避けると思った(4) ・苛々していた(29) ・避ける気がない(10) ・自分のことしか考えない(8) ・私が邪魔だった(1) ・異常な人(4)	・性格が悪い(5) ・いたずら(10) ・嫌がらせ(52) ・からかい(18) ・意地悪(11) ・わざと(10) ・調子に乗って(6)	・機嫌が悪い(3) ・嫌がらせ(2) ・乗せたくない(23) ・めんどくさい(21) ・仕事をしたくない(6)	・性格が悪い(10) ・嫌がらせ(8) ・気にくわない(18) ・嫌い(14) ・気分が悪い(4) ・八あたり(2) ・ねたみ(3)
非敵意判断	・考え事をしていた(6) ・不注意だった(20) ・酔っていた(2) ・急いでいて周りが見えない(34) ・用事で急いでいた(17) ・急いでいた(65) ・急いでいて余裕なし(8) ・偶然(8) ・人通りが多かった(2) ・私がぼんやりしていた(2)	・自分たちのことに夢中(5) ・自分の存在に気付かず(82) ・癖で(17) ・話に夢中(20) ・誰もいないと思った(21) ・周りが見えていない(5)	・見えなかった(49) ・気付かなかった(84) ・急用があった(16) ・客が乗っていた(39) ・予約車だった(29) ・家に帰るところ(3) ・手の振り方が悪い(4) ・場所が悪い(2)	・意見 ・考え方の相違(42) ・伝わらなかった(5) ・意味が分からない(22) ・発表がひどかった(83) ・準備不足(4) ・真面目・熱心な人(13) ・その人なりの考えがあった(11) ・そう思ったから(15) ・理解力がない(2) ・私のために(5)
その他	・スリ(2) ・分からない(2) ・その他(25)	・分からない(2) ・その他(7)	・分からない(5) ・その他(6)	・分からない(3) ・その他(5)

* 表中に示す項目は、字句表現上の同一性を基準にまとめられた各小分類の名称、()内は含まれる項目数。最上段の行は各場面の名称、最左列は小分類を内容面から整理して得られた大分類である。

Table2-2 対人挑発場面における質問②「その時どのような気持ちになりますか」への自由記述回答の整理*

場面 大分類	【衝突】	【灯り】	【タクシー】	【プレゼン】
怒り	・腹立つ(80) ・苛立つ(20) ・礼儀知らず(7) ・謝れ(55) ・不快(19)	・腹立つ(45) ・苛立つ(16) ・怒り(13) ・うっとうしい(12) ・めんどくさい(30) ・不快(10) ・非常識(9) ・あきれ(9)	・腹立つ(69) ・苛立つ(16) ・怒り(22) ・不快(12) ・クレーム・請求(9) ・マナー違反(15) ・タクシーを利用しない(3)	・腹立つ(51) ・苛立つ(6) ・反論する(8) ・人間性を疑う(4)
傷つき	・悲しい(8) ・驚く(25) ・嫌な気持ち(28) ・恥ずかしい(10) ・申し訳ない(5)	・嫌な気持ち(20) ・疑問(10) ・不安(7) ・悲しい(30) ・さびしい(16) ・悔しい(4)	・嫌な気持ち(18) ・悲しい(13) ・さみしい(9) ・恥ずかしい(4) ・残念(9) ・ショック・帰りたい(9) ・落ち込む(8)	・嫌な気持ち(11) ・ショック・泣きそう(19) ・恥ずかしい・情けない(32) ・困惑する・焦る(19) ・やめたい・逃げたい(9) ・悔しい(11) ・反省・申し訳ない(24) ・落ち込む(13)
その他	・痛い(10) ・気をつけてほしい(6) ・怪我がなく良かった(2) ・すぐ忘れる(8) ・諦める(6) ・何とも思わない(7) ・仕方ない(12) ・その他(13)	・やる気をなくす(4) ・周りを見てほしい(8) ・気にしない(11) ・仕方ない(20) ・その他(16)	・次を待つ・探す(18) ・運が悪い(21) ・仕方ない(20) ・その他(13)	・言い方を考えてほしい(8) ・そこまで言わなくても(7) ・大勢の前で言わないでほしい(18) ・ありがたい(7) ・悪い点を聞きたい(9) ・次にかす(12) ・仕方がない(6) ・気にしない(11) ・その他(17)

* 表中に示す項目は、字句表現上の同一性を基準にまとめられた各小分類の名称、()内は含まれる項目数。最上段の行は各場面の名称、最左列は小分類を内容面から整理して得られた大分類である。

Table3-1 対人疎外場面における質問①「どうしてその人は～をしたのだと思いますか」への自由回答反応の整理*

場面 大分類	【電車】	【自己紹介】	【笑い声】	【グループ】
嫌悪判断	・私が臭い(9) ・私が気持ちが悪い(4) ・気に入らない(13) ・私のとなりが嫌(43) ・迷惑（音漏れ・荷物など）だった(9) ・誰かが気に入らない(3) ・気まずい(4) ・同世代が嫌(3)	・興味が無い(6) ・つまらない(40) ・聞きたくない(10) ・自分のせい(8)	・性格が悪い(3) ・自分が変だった(12) ・びくついていると思った(9) ・ねたにされた(8) ・馬鹿にされた(7) ・容姿がおかしい(12) ・自分のことを笑った(16) ・動作がおかしい(6)	・周りになじめていない(4) ・私の話しかけにくい雰囲気(3) ・私に関心がない(8) ・私と組みたくない(5)
非嫌悪判断	・用事があった(10) ・降りる都合(68) ・何となく(8) ・隣の車両が空いていた(22) ・隣の車両に友人がいた(31) ・窮屈だった(14) ・何らかの事情(9) ・降りるため(6) ・偶然(6)	・携帯電話のため(19) ・用事があった(55) ・トイレ(120) ・抜けたかった(5) ・体調が悪かった(6) ・偶然(3)	・話が面白かった(74) ・何かおもしろいことがあった(35) ・盛り上がった・楽しかった(51) ・偶然(7) ・自分に関係ない(8)	・自分から行かなかったから(45) ・引込み思案・人みしり(3) ・出遅れた(8) ・親しい友人がいなかった(130) ・他が顔見知りで固まった(41) ・タイミング・運が悪い(3)
その他	・分からない(15) ・その他(8)	・分からない(5) ・その他(10)	・分からない(6) ・その他(4)	その他(5)

*表中に示す項目は、字句表現上の同一性を基準にまとめられた各小分類の名称、()内は含まれる項目数。最上段の行は各場面の名称、最左列は小分類を内容面から整理して得られた大分類である。

Table3-2 対人疎外場面における質問②「その時どのような気持ちになりますか」への自由回答反応の整理*

場面 大分類	【電車】	【自己紹介】	【笑い声】	【グループ】
怒り	・怒り(4) ・不快(5)	・腹立つ・不快(13) ・失礼(17)	・腹立つ(44) ・不快(11) ・うとうしい(2) ・馬鹿にする(4) ・迷惑・非常識(9)	・めんどくさい(3) ・先生に不満(6)
傷つき	・嫌な気持ち(17) ・傷つく(9) ・悲しい(26) ・不安になる(18) ・気になる(13) ・不思議・もやもやした気持ち(12) ・申し訳ない(11) ・自分や臭いを気にする(6)	・嫌な気持ち(10) ・悲しい・さびしい(26) ・傷つく・ショック(16) ・落ち込む・申し訳ない(12) ・不安・気になる(11) ・戸惑う(19) ・残念(3)	・嫌な気持ち(29) ・悲しい・ショック(6) ・驚く(4) ・不安(5) ・自分のことかと思う(21) ・気になる(13) ・恥ずかしい(6) ・さみしい(3) ・帰る・立ち去る(11)	・嫌な気持ち(6) ・悲しい(29) ・さみしい(65) ・あせる(14) ・困惑する(29) ・不安(10) ・反省・後悔(14) ・恥ずかしい(12)
その他	・疑問(11) ・どうでもいい(7) ・気にしない(33) ・何も思わない(61) ・何も感じない(5) ・良かった(12) ・その他(19)	・疑問(14) ・終わってからにしてほしい(10) ・緊張がましに(3) ・仕方ない(9) ・気にならない(28) ・緊張でそれどころではない(7) ・何も思わない(42) ・その他(20)	・楽しそう(15) ・若い(8) ・気にならない・どうでもいい(31) ・何も思わない(38) ・その他(10)	・やっぱり(7) ・誰かに入れてもらう(41) ・誰かに入れてほしい(19) ・仕方ない(16) ・何も思わない(7) ・その他(15)

*表中に示す項目は、字句表現上の同一性を基準にまとめられた各小分類の名称、()内は含まれる項目数。最上段の行は各場面の名称、最左列には、小分類を内容面から整理して得られた大分類である。

断、対人疎外場面における質問①については「嫌悪判断」と「非嫌悪判断」、質問②については対人挑発場面、対人疎外場面に共通して「怒り」と「傷つき」の大分類が得られた。以上の大分類をもとに、当該の大分類に含まれる回答を行なっている調査協力者に「有」、それ以外の調査協力者に「無」の質的変数を割り当てた。各変数の「有」の回答者数はTable 4に示す。

以上の回答者数を検討すると、対人挑発場面については「灯り」

を除く3つの場面でおおむね50名程度の回答者が敵意判断を示している。数値的には非敵意判断を下回るものの、以上の結果はこれらの場面が調査協力者から適切に敵意判断を引き出しえていることを示している。一方、「灯り」のみ100名程度の多数の調査協力者が敵意判断を報告している。これは、この場面が他の場面よりも、調査協力者に相手の敵意を推測させやすい特徴を持つことを示している。また、情緒的反応に目を向けると、対人挑発場面ではおおむ

Table 4 各変数の回答人数

場面 (回答者総数)	敵意判断	非敵意判断	怒り	傷つき
衝突 (233)	51	160	163	66
灯り (225)	105	128	134	75
タクシー (229)	50	182	138	65
プレゼン (227)	52	180	65	108
場面 (回答者総数)	嫌悪判断	非嫌悪判断	怒り	傷つき
電車 (231)	82	151	9	94
自己紹介 (218)	60	174	30	82
笑い声 (225)	70	171	62	78
グループ (219)	16	205	9	145

ね「怒り」を報告するものが「傷つき」よりも多くみられた。対人挑発場面が何らかの実際的な損害を被る場面であることを考慮すると、以上の分布は妥当なものであるといえる。「プレゼン」のみで、「傷つき」が「怒り」を上回っている。この場面の状況設定には、実質的な損害だけでなく他者からの非難としての側面が含まれている。その結果、次に述べる対人疎外場面としての性質も持つことになったものと考えられる。ただし、その「プレゼン」においても、敵意判断が他の場面と同程度に見られており、かつ、対人疎外場面と比較すると怒りの回答者数が多い。したがって、対人挑発場面としての意義も十分に兼ね備えているものと考えられる。

対人疎外場面については、「グループ」をのぞく3場面で対人挑発場面よりも多くの嫌悪判断を示す回答者がみられた。これは、敵意判断よりも嫌悪判断の方が広くみられることを示唆している。ただし、「グループ」ではごく少数の者しか嫌悪判断を回答していない。これは、この場面の状況設定上、非敵意的判断に回答が集中したためであると考えられる。そこで、「グループ」に関するデータは以後の分析から除外することとした。情緒的反応としては、すべての場面で「傷つき」が「怒り」を上回っている。「笑い声」においてのみ「怒り」が「傷つき」と同程度の度数を示している。このことは、この場面が対人挑発場面としての性質もあわせ持つことを示唆している。しかしながら、この場面においても「傷つき」が「怒り」を上回っており、かつ、相当数の嫌悪判断がみられる。このことから、対人疎外場面としての性質を十分に保持しえているものと考えられた。

2. 場面間の敵意判断ならびに嫌悪判断の連関分析

場面間における意図判断の連関を検討するため、それぞれの場面における意図判断の有無をもとにクロス集計表を作成し χ^2 乗検定をおこなった。その結果、有意である場合にはCramerの連関係数(V)を算出した(Table 5, Table 6)。

対人挑発場面の場面間における敵意判断の連関は、いずれも有意なものとはならなかった。このことは、各場面の敵意判断同士に関連性が見られなかったことを示唆している。個々のクロス集計表の度数分布を見ても、「衝突」と「灯り」、「衝突」と「タクシー」、「衝

Table 5-1 敵意判断の連関 (衝突×灯り)

場面	灯り		
	無	有	計
衝突	無 84(80.6)	62(65.4)	146
	有 22(25.4)	24(20.6)	46
計	106	86	192

 $\chi^2(1)=1.33, n.s.$

Table 5-2 敵意判断の連関 (衝突×タクシー)

場面	タクシー		
	無	有	計
衝突	無 118(116.1)	30(31.9)	148
	有 35(36.9)	12(10.1)	47
計	153	42	195

 $\chi^2(1)=0.58, n.s.$

Table 5-3 敵意判断の連関 (衝突×プレゼン)

場面	プレゼン		
	無	有	計
衝突	無 117(116.6)	35(35.4)	152
	有 31(31.4)	10(9.6)	41
計	148	45	193

 $\chi^2(1)=0.03, n.s.$

Table 5-4 敵意判断の連関 (灯り×タクシー)

場面	タクシー		
	無	有	計
灯り	無 86(81.5)	17(21.5)	103
	有 62(66.5)	22(17.5)	84
計	148	39	187

 $\chi^2(1)=2.63, n.s.$

Table 5-5 敵意判断の連関 (灯り×プレゼン)

場面	プレゼン		
	無	有	計
灯り	無 85(180.1)	18(22.3)	103
	有 60(64.3)	22(17.7)	82
計	145	40	185

 $\chi^2(1)=2.36, n.s.$

Table 5-6 敵意判断の連関 (タクシー×プレゼン)

場面	プレゼン		
	無	有	計
タクシー	無 117(115.9)	31(32.1)	148
	有 31(32.1)	10(8.9)	41
計	148	41	189

 $\chi^2(1)=0.22, n.s.$

注: いずれの分析においても分析対象者は両場面に回答をおこなった調査協力者である。

突」と「プレゼン」、「タクシー」と「プレゼン」の間ではほとんど期待度数どりの値となっている。「灯り」と「タクシー」、ならびに、「灯り」と「プレゼン」では、若干出現度数に偏りが見られるが、有意な値とはならなかった。

一方、対人疎外場面の場面間における嫌悪判断の連関は、すべてにおいて有意な出現度数の偏りが確認された。CramerのVを算出したところ、「電車」と「自己紹介」で.166、「電車」と「笑い声」で.286、「自己紹介」と「笑い声」で.234であった。これらの値は、弱いながらも両場面の嫌悪判断に正の連関がみられることを示唆している。

3. 場面内における意図判断と情緒的反応の連関

1. の分析結果から、対人挑発場面においては敵意判断と「怒り」の情緒的反応との間、対人疎外場面においては嫌悪判断と「傷つき」との間に正の連関が推測された。そこで、対人挑発場面に関しては敵意判断と「怒り」、対人疎外場面に関しては嫌悪判断と「傷つき」とのクロス集計表を作成し、 χ^2 乗分析をおこなった。また、有意な結果についてはCramerの連関係数(V)を算出した(Table 7, Table 8)。

対人挑発場面の結果を見ると、「衝突」と「タクシー」については各セルの度数に一定の隔たりが見受けられる。しかし、検定の結果は有意なものとはならなかった。このことは、両場面における敵意判断と怒りの回答に有意な関連が確認されなかったことを示唆している。一方、「灯り」と「プレゼン」においては有意な χ^2 乗値が得られたため、Cramerの連関係数を算出したところ、前者で.263、

Table 6-1 嫌悪判断の連関 (電車×自己紹介)

場面	自己紹介		
	無	有	計
電車	無 95(88.5)	26(32.5)	121
	有 41(47.5)	24(17.5)	65
計	136	50	186

 $\chi^2(1)=5.13, p<.05: V=.166$

Table 6-2 嫌悪判断の連関 (電車×笑い声)

場面	笑い声		
	無	有	計
電車	無 98(85.9)	26(38.1)	124
	有 35(47.1)	33(20.9)	68
計	133	59	192

 $\chi^2(1)=15.67, p<.01: V=.286$

Table 6-3 嫌悪判断の連関 (自己紹介×笑い声)

場面	笑い声		
	無	有	計
自己紹介	無 98(89.3)	32(40.7)	130
	有 25(33.7)	24(15.3)	49
計	123	56	179

 $\chi^2(1)=9.83, p<.01: V=.234$

注: いずれの分析においても分析対象者は両場面に回答をおこなった調査協力者である。

後者で.281であった。これは、弱いながらも敵意判断を回答した人は「怒り」の情緒的表現を回答し、逆に、敵意判断を回答しなかった人は「怒り」の情緒的反応を示さなかったことを示唆している。

対人疎外場面の結果を見ると、すべての場面で有意な χ^2 乗値がえられたので連関係数を算出した。その結果、「電車」においては.454、「自己紹介」においては.350、「笑い声」においては.297の値が得られた。この数値は、概ね中程度の強さにおいて、嫌悪判断を示す人は「傷つき」の情緒的反応を回答し、逆に、嫌悪判断を示さない人は「傷つき」を報告しないという関連が見られることを示唆している。

4. 対人挑発場面と対人疎外場面における反応形式の差異に関する分析

自由記述回答の整理の過程で、以上の回答内容に関わる結果以外にも、回答形式において対人挑発場面と対人疎外場面では差異が見られることが示唆された。そこで、それらの特徴を検討するため、以下の付加的な分析をおこなった。

対人挑発場面と対人疎外場面の回答形式を比較すると、前者に比して後者において質問①への回答で意図判断と非意図判断の両方を示す者が多く見られた。このような二重回答は、回答に際しての調査協力者の「迷い」を反映する点で意義のある指標であると考えられた。そこで、それらの出現人数を算出した（Table 9）。

回答者数と比率を参照すると、やはり対人疎外場面のほうが対人挑発場面よりも二重回答が多いように見受けられる。このような結果は、両場面の性質を考慮することで一定程度説明が可能であると考えられる。つまり、対人挑発場面は、いずれの場合も何らかの実際の損害が与えられる性質を有しているため、調査協力者に対する衝撃の度合いが強いものと思われる。それに対して、対人疎外場面は、そのような具体的な損害はともなわず、あくまで感情的な側面に対する負担が中心となる。そのため、前者では「迷う」余地もなく直接的で断定的な反応に結びつきやすかったのではないかと考えられる。一方、対人疎外場面ではそれに比較して衝撃の度合いが弱く、「迷い」の体験を感じる余地が生じた可能性がある。以上のような両場面の性質が回答形式に差異をもたらした可能性が考えられる。

また、いまひとつ両場面の回答形式に際立った差異が見受けられた。それは、対人疎外場面では質問②（その時の情緒的反応を問う質問）に対して嫌悪判断の回答をおこなう調査協力者が多数見られたのに対し、対人挑発場面ではそのような回答がほとんど見られなかった点である。特に、前者では、回答②にのみ嫌悪判断を回答した者も多数見られた。これらの点における差異を明確にするため、ここでもそのような回答を行なった調査協力者の人数を算出した（Table 10）。

各回答者数を見ると、明らかに対人疎外場面において質問②に対

Table 7-1 敵意判断と怒りの連関（衝突）

場面	怒り		
	無	有	計
敵意判断	無	58(54.7)	124(127.3)
	有	12(15.3)	39(35.7)
	計	70	163

$$\chi^2(1)=1.32, n.s.$$

Table 7-2 敵意判断と怒りの連関（灯り）

場面	怒り		
	無	有	計
敵意判断	無	63(48.5)	57(71.5)
	有	28(42.5)	77(62.9)
	計	91	134

$$\chi^2(1)=15.52, p<.01 : V=.263$$

Table 7-3 敵意判断の連関（タクシー）

場面	怒り		
	無	有	計
敵意判断	無	75(71.1)	104(107.9)
	有	16(19.9)	34(30.1)
	計	91	138

$$\chi^2(1)=1.60, n.s.$$

Table 7-4 敵意判断の連関（プレゼン）

場面	怒り		
	無	有	計
敵意判断	無	137(124.9)	38(50.1)
	有	25(37.1)	27(14.9)
	計	162	65

$$\chi^2(1)=17.90, p<.01 : V=.281$$

する意図判断の回答が多いことがわかる。質問②にのみ意図判断を示した回答者も一定程度みられる。これらの回答者は、おおむね質問①には非嫌悪判断（相手の過失や何らかの不可避な事情、偶然、自分自身の要因）を回答し、質問②に対しては嫌悪判断を回答したことになる。本研究における質問①がその出来事が生じた原因に焦点を当てた質問であり、質問②はそのときの気分や感情を問うものであることを考慮すると、以上の反応は、原因の認知と自分の感情とを区別して回答している可能性を示している。それに対して、対人挑発場面においてそのような反応が見られなかった。このことは前述の衝撃の強さと関係して、対人挑発場面が事態の原因判断と、そのときの情緒的反応が区別されにくい場面である可能性を示唆するものと思われる。

考察

1. 反応の抑制傾向について

本研究では、先行研究を参考としつつ新たに対人挑発場面と対人疎外場面を作成し、場面想定法を用いて一般青年の自由記述回答を収集分析した。その結果、対人疎外場面における嫌悪反応についてはおおむね有意な結果が得られた一方で、対人挑発場面における敵意判断については十分な結果が得られなかった。以下では、こ

Table 9 二重回答の回答人数

対人挑発場面	衝突	灯り	タクシー	プレゼン
	7(9.8)	17(16.2)	13(26.0)	13(25.0)
対人疎外場面	電車	自己紹介	笑い声	
	25(30.5)	25(45.0)	25(35.7)	

()内は意図判断回答者に占める割合

Table 10 質問②に意図判断を回答した回答者数

対人挑発場面	衝突	灯り	タクシー	プレゼン
	1(1)	5(2)	1(1)	1(0)
対人疎外場面	電車	自己紹介	笑い声	
	31(19)	17(12)	29(17)	

()内は質問②にのみ意図判断を示した回答数

Table 8-1 嫌悪判断と傷つきの連関（電車）

場面	傷つき		
	無	有	計
嫌悪判断	無	113(88.4)	36(60.6)
	有	24(48.6)	58(33.4)
	計	137	94

$$\chi^2(1)=47.53, p<.01 : V=.454$$

Table 8-2 嫌悪判断と傷つきの連関（自己紹介）

場面	傷つき		
	無	有	計
嫌悪判断	無	116(99.59)	43(59.5)
	有	21(37.59)	39(22.5)
	計	137	82

$$\chi^2(1)=26.80, p<.01 : V=.350$$

Table 8-3 嫌悪判断と傷つきの連関（笑い声）

場面	傷つき		
	無	有	計
嫌悪判断	無	116(101.3)	39(53.7)
	有	31(45.7)	39(24.3)
	計	147	78

$$\chi^2(1)=19.88, p<.01 : V=.297$$

の対人挑発場面における敵意判断に関する結果について検討を加える。

本研究の結果全体について、反応に対する抑制傾向の問題があてはまる。対人挑発場面においても対人疎外場面においても、そもそも対人関係における否定的な体験を取り扱うものである。言い換えるならば、日常的にはあまり出会いたくない出来事の列挙となっている。さらに、何らかの他者の意図により生じたとする意図判断は、それらの出来事をより一層否定的な出来事として解釈することを意味している。一般的にそのような判断は、ネガティブな情緒的反応をもたらす、対人関係に悪影響をあたえるような行動（攻撃ないしは逃避など）に向かわせるものである。その結果、対人関係は対立や離別などの葛藤的なものになりやすい。それゆえ、上記のような判断は、通例抑制される傾向にあるものと考えられる。中でも、対人挑発場面は何らかの具体的な損害を被る場面であり、その事態を相手の敵意にあると位置付ける敵意判断はもっとも否定的な結果をもたらしかねないものである。したがって、対人疎外場面における嫌悪判断よりも強い抑制が働いた可能性が考えられる。さらに、本研究では自由記述法を用いて回答を求めている。自由記述法は、他の評定尺度による回答に比較して、調査協力者自身の自発的な回答姿勢により影響されやすく、調査協力者による抑制や拒否の影響を受けやすかったものと思われる。以上のことが影響して、対人挑発場面に関する結果が弱められたことが考えられる。

2. 場面特定性について

敵意帰属研究の中では、結果の再現性は高いもの、その値が一般的に小さいことが指摘されている（Crick & Dodge, 1994, Orobio de Castro et al., 2002）。この点について、特に成人を対象とする研究においては場面特定性の影響が指摘されている（Homant & Kennedy, 2003）。ここで、場面特定性による影響とは、個々の場面設定（場所、相手の性別や年齢、障害の具体的な内容など）に対する反応の個人差が敵意帰属の傾向に影響を与え、その結果を希釈することを意味している。本研究においても場面設定は多様であり、その点の影響が考えられる。本研究で用いた対人挑発場面の場面設定と結果を照らし合わせると、敵意判断と情緒的反応の連関において有意な値をえた場面はいずれも相手が同世代の他者となっている。それに対して、同じ連関において有意な値が得られなかった場面は、いずれもが見ず知らずの他者により引き起こされた挑発状況となっている。挑発場面の相手との関係により敵意帰属の程度が異なることを示唆する研究もあり（Steinberg & Dodge, 1983）、この場面設定上の差異が結果に影響した可能性が考えられる。

さらに、上記のことと関連して、回答者の性差と年齢が結果に影響を与えた可能性も考えられる。いくつかの敵意帰属研究が性差と年齢の影響を示唆している。Crick ら（Crick, 1995, Crick & Grotpeter, 1995, Crick, Grotpeter, & Bigbee, 2002）は、従来の敵意帰属研究が男児に特有な顕在的攻撃性（overt aggression）のみを対象としてきたことを指摘し、女兒に特有な関係的攻撃性（relational aggression）を取り上げ、女兒の方が男児よりも関係的攻撃性が高いことを示している。また、一部で学童期の後期に向かって敵意帰属傾向や攻撃性が減少すること、特に、顕在的攻撃性が減少することを示唆する結果を報告している。前者の性差は、男性と女性の行動上の、ないしは、社会的な性差に基づくものと考えら

れ、後者の年齢差は言語・認知面での発達的变化（Crick & Dodge, 1994）、ならびに、1. で取り上げた抑制傾向が関係しているものと考えられる。本研究の調査協力者は青年期であり、かつ、ほとんどが女性により構成されている。同時に、本研究で用いた対人挑発場面の場面設定をみると、有意な結果がえられ場面（「灯り」と「プレゼン」）はいずれも関係的挑発場面に近いものであり、それ以外の場面のうち一つは明確な顕在的攻撃性（「衝突」）の場面となっている。以上の関連からは、男性の少なさ、ならびに、青年期というより成熟した年齢段階が敵意判断、なかでも、顕在的攻撃性に関わる場面を中心に結果を弱めた可能性が考えられる。

3. 対人挑発場面对人疎外場面の差異について

一方で、本研究では対人疎外場面における嫌悪判断については、場面間の嫌悪判断の連関においても、場面内の嫌悪判断と傷つきの情緒的反応の連関においてもほぼ一貫して有意な結果がえられた。その点を考慮すると、対人挑発場面における結果の不十分さは、対人挑発場面对人疎外場面の構造上の差異にも関係していることが考えられる。

対人挑発場面は、おもに対人関係において何らかの実験的な損害が発生する場面である。そのため調査協力者に対する衝撃度の度合いが増大しやすいものと考えられる。一般にこの衝撃度の大きさは、調査協力者を余裕のない、即座的で直接的な反応へ駆り立てやすいものと考えられる。その結果として、その場面の状況設定、あるいは、瞬時の抑制傾向などの要因に影響を受け、結果の連関が希釈化されやすかったのではないかと推測される。

一方で、対人疎外場面は、実験的な損害をもたらすものではなく、あくまで情緒的な負担を引き起こす可能性のある場面にすぎない。その点でいえば、場面がもたらす衝撃度はその分緩和されるものと思われる。付加的な回答形式の分析にも一部みられたように、このことは対人疎外場面における迷いの体験、ならびに、原因の現実的な判断と内面的な体験を分化して意識する余裕を調査協力者にもたらしめたものと考えられる。このような余裕は、一方では、対人挑発場面におけるような即座的で直接的な反応に向かわずにすむことに結びついているものと予想される。そして、その程度に応じて、調査協力者側は、準備された個人内要因、すなわち、自分自身に対する不安や自信のなさ、否定的な判断に対する対応力、現実設定を正確にとらえる判断力などを介入させることが可能となり、反応に一貫性が維持されやすかったのではないと思われる。そして、このことが対人疎外場面における諸連関に一貫性のある有意な結果をもたらした可能性が考えられる。

その他、本研究の対人挑発場面对人疎外場面においては情緒的反応の出現頻度に明確な差異がみられた。このことは、敵意判断と嫌悪判断の体験のあり方に違いがあることを示唆している。ただし、前段の考察も含めて、この問題は本研究の範囲を超えるものであり、単なる推測の域をでるものではない。今後それらの詳細な側面に焦点付けた研究を通じて検討されるべき課題である。

今後の展望

以上の考察は、今回の調査手法について、特に対人挑発場面における場面設定、ならびに、回答方法、調査協力者のサンプリングに

ついて再検討が必要であることを示している。以下では、それらの改善点について今後の展望を考察する。

反応の抑制傾向による影響については、回答方法の変更が第一に考えられる。前述のとおり、今回用いた自由記述法は反応の抑制の影響を受けやすい手法であったと考えられる。この点については、先行研究で用いられている反応収集方法が参考となるであろう。ひとつには、インタビューや録音を用いて口頭での回答を求める手法が考えられる。これらの手法は、記述するという手続きが省略される分、調査協力者のその時の判断や感情が表出されやすいものと思われる。ただし、インタビューでは面接者との相互作用という不確定な要因が関与する危険性がある。録音による回答収集はその懸念を除くことができるが、実験的手続きが必要となり集団での実施が困難となる。敵意判断の出現頻度の低さを考慮すると、このことは実際の制限となる可能性がある。一方、反応へ抑制傾向を除外するもっとも簡易な手法は、評定尺度法や選択肢法を用いることである。いずれの場合も、回答内容があらかじめ準備されていることから、否定的な回答も行いやすくなると考えられる。しかしながら、これらの手法は、本来多種多様である調査協力者の体験様式を過度に単純化してしまう危険性がある。その結果、現実の対人葛藤体験のもつアンビバレンスやフレキシビリティが失われる、あるいは、実際的な問題としては、調査協力者が回答しにくいものとなる可能性がある。以上の点を考慮して、回答手法を慎重に検討する必要があると考えられる。

また、調査協力者のサンプリングの問題については、今回は大学生を対象とし、特に女性が大半を占めていた。そのため、対人挑発場面における敵意判断の性差、年齢差の影響が考えられた。したがって、第一に今後の研究においては男性をサンプリングの中に含めるとともに、性差をひとつの重要な要因として分析の中に含める必要があると考えられる。年齢差については、より低年齢層も含めた研究の必要性が示唆される。従来の敵意帰属研究は、小学校低学年から高学年にかけての児童を研究対象として有意な結果を得ている。したがって、小学生から中学生、高校生なども含めて、対人挑発場面における敵意判断と情緒的反応について、発達的变化も視野に入れた研究が求められる。

以上の修正点は、いずれも原則的には実施が可能なものである。一方で、場面特定性の影響はもっとも修正が困難な問題であると考えられる。今回対人挑発場面として用いた4場面は、相手の性別や年齢、状況設定、損害の種類などでそれぞれ異なっている。その影響を除外するためには、以上の条件を一定にして場面を設定することになる。しかし、今回の調査結果でいずれの場面も一定程度の敵意判断と怒りの反応を惹起していることを考慮すると、特定の種類の場面のみを選択する合理的な根拠は見出せないのではないかとと思われる。しかも、対人疎外場面における嫌悪判断との差異として考察したように、場面特定性に影響されやすいことそのものが対人挑発場面のひとつの性質であるとも考えられる。この問題点自体今後の研究の結果をみつつ慎重に検討されるべきものではあるが、どうしても場面特定性の影響を除外できないのであれば、個々の場面(の種類)への反応について、その場面に含まれる状況要因も考慮して個別に検討していくよりほかはないこととなる。その際には、それらの状況要因が偶発的なものであるのか、あるいは、性差や立場の

差などの社会的条件によるものであるのか、さらには、その状況要因に反応すること自体が対人挑発場面における認知の様式と関連するものであるのか、などの諸点から精査していく必要があると考えられる。

謝辞

本調査の実施にあたって、愛知県立大学の堀尾良弘先生、大阪府立大学の橋本朋広先生、千里金欄大学の串崎幸代先生にご協力いただきました。また、結果の分析にあたっては、神戸大学発達科学部、ならびに、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の相澤研究室の学生・大学院生の皆様、同研究科心身発達専攻博士課程後期課程の大学院生の皆様にもご協力いただきました。記して感謝いたします。

《引用文献》

- 相澤直樹(2009). 対人葛藤場面における他者への敵意ならびに嫌悪の位置づけについて―場面想定法による測定を試み― 日本心理臨床学会第28回秋季大会発表論文集, 216.
- Akhtar, N. & Bradley, E.J. (1991). Social information processing deficits of aggressive children: Present findings and implications for social skills training. *Clinical Psychology Review*, **11**, 621-644.
- Combs, D.R., Penn, D.L., Wicher, M., & Waldheter, E.(2007). The ambiguous intentions hostility questionnaire(AIHQ): A new measure for evaluating hostile social-cognitive biases in paranoia. *Cognitive Neuropsychiatry*, **12**, 128-143.
- Crick, N.R.(1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Development and Psychopathology*, **7**, 313-322.
- Crick, N.R. & Dodge, K.A.(1994). A review and reformulation of social information-processing mechanism in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- Crick, N.R. & Grotpeter, J.K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Crick, N.R., Grotpeter, J.K., & Bigbee, M.A. (2002). Relationally and physically aggressive children's intent attributions and feelings of distress for relational and instrumental peer provocations. *Child Development*, **73**, 1134-1142.
- Dodge, K.A.(1980). Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, **51**, 162-170.
- Dodge, K.A., Murphy, R.R., & Buchsbaum, K. (1984). The assessment of intention-cue detection skills in children: Implications for developmental psychopathology. *Child Development*, **55**, 163-173.
- Dodge, K.A. & Newman, J.P.(1981). Biased decision-making processes in aggressive boys. *Journal of Abnormal Psychology*, **90**, 375-379.
- Dodge, K.A. & Tomlin, A.M. (1987). Utilization of self-schemas as a mechanism of interpersonal bias in aggressive children. *Social*

Cognition, 5, 280-300.

Dodge, K.A. & Somberg, D.R. (1987). Hostile attributional biases among aggressive boys are exacerbated under conditions of threats to the self. *Child Development*, 58, 213-223.

Epps, J. & Kendall, P.C.(1995). Hostile attributional bias in adults. *Cognitive Therapy and Research*, 19, 159-178.

Homant, R. & Kennedy, D.B.(2003). Hostile attribution in perceived justification of workplace aggression. *Psychological Reports*, 92, 185-194.

久木山健一 (2000). 大学生の仲間入り場面における社会的情報処理の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 47, 223-234.

久木山健一 (2002). 社会的情報処理尺度の妥当性に関する試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 49, 207-215.

Steinberg, M. S. & Dodge, K.A.(1983). Attributional bias in aggressive adolescent boys and girls. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 4, 312-321.

Orobio de Castro, B., Veerman, J.W., Koops, W., Bosch, J.D., & Monshouwer, H.J. (2002). Hostile attribution of intent and aggressive behavior: A meta-analysis. *Child Development*, 73, 916-934.

Tremblay, P.F. & Belchevski, M. (2004). Did the instigator intend to provoke? A key moderator in the relation between trait aggression and aggressive behavior. *Aggressive Behavior*, 30, 409-424.

吉澤寛之 (2005). 社会的情報処理モデルによる反社会的行動研究の統合的考察—心理学的・生物学的・社会学的側面を中心として 名古屋大学大学院教育人間発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 52, 95-122.

《付録》場面想定法による質問例

以下の出来事が実際にあなたに起こったと想像してください。

『あなたは、人通りの多い繁華街の通りを一人で歩いています。すると、前から若い男性が早足にあなたのほうに歩いてきます。次の瞬間その男性の肩が激しくあなたにあたり、あなたは危うく転倒してしまいそうになります。周囲の人も一瞬驚いてあなたのほうをみました。にもかかわらず、その男性は謝ることもなく去っていきました。』

1) 「どうしてその男性はあなたにぶつかった」のだと思いますか？

2) その時、あなたはどのような気持ちになりますか？